

序にかえて

ロシア芸術の真珠

女子栄養大学教授 長谷川 恭子

ロシアの古都サンクト・ペテルブルグは、今年、建都300年を祝っている。ロシア皇帝ピョートル一世が対スウェーデン戦に勝利し、バルチック海への出口を確保するために、1703年に湾岸要塞を建立してから300年である。1712年にはロシア首都となった。ロシア革命後の1918年に首都がモスクワに戻るまでの約200年間、政治、経済、文化、芸術の中心地として発展した。ネヴァ川と多くの運河に囲まれた〈北のヴェネチア〉は、建都300年を祝って修復され、街中がしっとりと美しくたぎんでいた。どんよりと曇った暗い空の下で、白、水色、薄緑を基調とし、金を装飾にふんだんに使った建物が輝いている。

この都の名称の変遷は、ロシアの歴史を刻んでいて興味深い。もともとドイツ名のサンクト・ペテルブルグであったのが、1914年（第一次大戦）にロシア語のペトログラードに改名され、1924年にはレーニンを称えてレニングラードになり、更にソ連崩壊により再びサンクト・ペテルブルグに戻った。この古都で、歴史に想いをはせながら、ピョートル宮殿、エカテリーナ宮殿、エルミタージュ美術館、ロシア正教の数々の寺院など、私のロシア観を塗り替える多くのものに会った。

そのなかで、ひときわ感動したのがペテルブルグから約20km離れたピョートル宮殿（町の名も同じ意味のペトロドヴァレツ）である。この宮殿の北に面したテラスから続く「下の庭園」とよばれる大噴水庭園は、海拔100メートルあるパービゴンの丘の湧き水が貯水池にためられ、そこから導管を通して自然の落差を利用して作られた大滝（カスケード）と、その下の庭園をバルト海（フィンランド湾）まで長く続くなだらかなくだり坂の並木道に沿った64（宮殿の裏にある上の公園を合わせると140以上）の噴水と、それらに組み合わされた彫像群が特徴である。

「ロシア芸術の真珠」と説明書にかかれていたのを、本物を見て納得、感動した。

フィンランド湾からだんだん高くなるテラス状の地形を利用してこのような自然を活かした広大な自動給水システムが1721年に出来たということは素晴らしいことで、貴族社会の莫大な資金と、多くの建築家、造園技師、彫刻家その他多くの働き手の高い技術と献身的な働きと犠牲によって、この比類ない夏の宮殿が出来たのであろう。数多くの噴水が、金色に輝く彫像と共に様々な物語をかもし出し、高台の宮殿からバルト海まで一直線にゆるやかに流れ下る運河に多くの獅子孔から流れ込んでいる噴水の水と、菩提樹林の自然との調和はすばらしいものであった。

同じく落差を利用した他国の噴水に比べて、この庭園は、自然地形を見事に組み込んだ広大な庭園のすばらしい利水設計であることに言葉を失った。

第二次世界大戦で、ナチス・ドイツ軍による900日間の「レニングラード包囲」に耐えて勝利と栄誉を得た証というオベリスクを見たが、その時の犠牲者は約60万人に及んだという。そのような波乱に満ちた過去があったとは思えないほど見事に修復され、自然の利をあまねく用いた先人の知恵と努力を静かにたたえる古都とその周辺は、かつて共産主義国であったロシアに、西欧貴族社会の香りを強くのこす町々であった。

しかし、ペレストロイカによって言論統制と密告社会は崩壊したにも関わらず、一部のサービス業を除いて人々の表情は笑みに乏しく、硬い。また、大学教授や研究者の収入は極めて低く、アルバイトなどによってやっと生活を支えている状態であると、私たちのガイド（アルバイト）をしてくれた動物学者から聞いた。今回はモスクワとサンクト・ペテルブルグと二都市のみであったが、激動の歴史にもゆるがぬ高い芸術性と文化の維持・修復意欲の片鱗に触れて、いろいろな事を考えさせられたロシア訪問であった。